

## 世界遺産と富士

「伏流水」130706

「『お互いは哀れだなあ』  
と言いだした。『こんな顔をして、こんなに弱っている、いくら日露戦争に勝つて、一等国になってもだめですね。(中略)あなたは東京がはじめてなら、まだ富士山を見たことがないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない』(中略)三四郎は日露戦争以後こんな人間に出会うとは思ってもよらなかった。どうも日本人じゃないような気がする。『しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう』と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、『滅びるね』と言った」

夏目漱石作『三四郎』の一節です。ここに「かの男」とは、後に主人公三四郎と大いに関わり合うことになる、うだつの上がない第一高等学校教授広田先生のことです。浜松駅で美しい西洋婦人を見て刺激された広田先生は、ロシアとの戦争の「辛勝」に過剰な自信を獲得した「一等国・日本国民」への痛烈な批判をこ

めて「国はだめだが、富士は最高」と言ったのでした。広田先生はほかでもない作者漱石その人であり、この発言は彼の英国経験からみた日本認識でありました。富士山が「日本一」であることには広田先生でなくとも多くの日本人は異議をさしはさまないでしょう。しかし、その根拠は山容の美しさ、懸垂線という力学的にもっとも安定な曲線のもつ優美さです。

ところが、この度富士山がユネスコ世界遺産に登録されたのは山容の美しい「自然」のためではなく、「富士山と信仰・芸術の関連遺産群」という「文化遺産」としてだそうです。つまり、私たちが語り継ぎ言い継いできた懸垂線の美ではなく、現代日本人の多くがよくは知らないであろう「信仰」と「芸術」だということです。

「世界遺産登録」が決まるやいなや兜町では地元鉄道会社をはじめ富士山観光関連株がのきなみ上昇。これでは「信仰」・「芸術」よりも「経済」です。ユネスコの期待する「文化遺産」をどう維持管理していくか、世界遺産登録は、新たな「日本一」の悩みの始まりです。

( 1 2 字 × 7 0 行 )